

表38 毎日の健康と年齢階層とのクロス表

(χ<sup>2</sup>乗定:P<.01)

		年齢階層			合計
		40—64歳	65—74歳	75歳以上	
1.元気で病気はない	人数	248	125	52	425
	%	16.97	12.03	12.35	14.55
	調整済残差	3.72	-2.87	-1.38	
2.ときに風邪をひく程度	人数	444	294	136	874
	%	30.39	28.30	32.30	29.92
	調整済残差	0.55	-1.42	1.15	
3.やや病弱	人数	38	38	15	91
	%	2.60	3.66	3.56	3.12
	調整済残差	-1.60	1.25	0.57	
4.定期的に診断、服薬	人数	712	532	164	1408
	%	48.73	51.20	38.95	48.20
	調整済残差	0.57	2.41	-4.10	
5.寝たり、起きたり	人数	13	24	25	62
	%	0.89	2.31	5.94	2.12
	調整済残差	-4.62	0.52	5.87	
6.ほとんど寝たきり	人数	6	26	29	61
	%	0.41	2.50	6.89	2.09
	調整済残差	-6.34	1.16	7.45	
合計	人数	1461	1039	421	2921
	%	100.00	100.00	100.00	100.00

注)調整済残差:残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき P<.05、絶対値が2.58以上のとき P<.01。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。

表39 治療を受けている病気と年齢階層とのクロス表

(χ<sup>2</sup>乗定:P<.05)

			年齢階層			合計
			40—64歳	65—74歳	75歳以上	
治療を受けている 病気	病気あり	人数	992	737	271	2000
		%	68.41	72.90	64.99	69.49
		調整済残差	-1.27	2.92	-2.16	
	病気なし	人数	445	263	141	849
		%	30.69	26.01	33.81	29.50
		調整済残差	1.41	-3.02	2.09	
	不明	人数	13	11	5	29
		%	0.90	1.09	1.20	1.01
		調整済残差	-0.60	0.32	0.42	
合計		人数	1450	1011	417	2878
		%	100.00	100.00	100.00	100.00

注)調整済残差:残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき P<.05、絶対値が2.58以上のとき P<.01。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。

表40 治療を受けた病気の疾病名と年齢階層とのクロス表

		年齢階層			合計	χ <sup>2</sup> 乗検定
		40—64歳	65—74歳	75歳以上		
脳血管障害など	無	人数	1464	1042	425	2931
		%	99.18	95.30	88.94	96.32
		調整済残差	8.23	-2.17	-8.73	
	有	人数	12	49	47	108
		%	0.82	4.70	11.06	3.68
		調整済残差	-8.23	2.17	8.73	
虚血性心疾患など	無	人数	1439	991	404	2834
		%	98.29	95.11	95.06	96.69
		調整済残差	4.84	-3.56	-2.03	
	有	人数	25	51	21	97
		%	1.71	4.89	4.94	3.31
		調整済残差	-4.84	3.56	2.03	
高血圧	無	人数	1373	888	382	2643
		%	93.78	85.22	89.88	90.17
		調整済残差	6.56	-6.69	-0.22	
	有	人数	91	154	43	288
		%	6.22	14.78	10.12	9.83
		調整済残差	-6.56	6.69	0.22	
糖尿病、耐糖障害など	無	人数	1408	981	410	2799
		%	96.17	94.15	96.47	95.50
		調整済残差	1.77	-2.62	1.05	
	有	人数	56	61	15	132
		%	3.83	5.85	3.53	4.50
		調整済残差	-1.77	2.62	-1.05	
貧血	無	人数	1411	1011	415	2837
		%	96.38	97.02	97.65	96.79
		調整済残差	-1.27	0.53	1.08	
	有	人数	53	31	10	94
		%	3.62	2.98	2.35	3.21
		調整済残差	1.27	-0.53	-1.08	
胃十二指腸潰瘍など	無	人数	1390	962	384	2736
		%	94.95	92.32	90.35	93.35
		調整済残差	3.47	-1.65	-2.68	
	有	人数	74	80	41	195
		%	5.05	7.68	9.65	6.65
		調整済残差	-3.47	1.65	2.68	
下痢・便秘症など	無	人数	1387	966	406	2759
		%	94.74	92.71	95.53	94.13
		調整済残差	1.40	-2.44	1.33	
	有	人数	77	76	19	172
		%	5.26	7.29	4.47	5.87
		調整済残差	-1.40	2.44	-1.33	

表40 治療を受けた病気の疾病名と年齢階層とのクロス表

		年齢階層			合計	χ <sup>2</sup> 乗検定	
		40—64歳	65—74歳	75歳以上			
		人数	1464	1042	425	2931	
肝炎、肝硬変など	無	人数	1404	1022	417	2843	P<.01
		%	95.90	98.08	98.12	97.00	
		調整済残差	-3.47	2.55	1.46		
	有	人数	60	20	8	88	
		%	4.10	1.92	1.88	3.00	
		調整済残差	3.47	-2.55	-1.46		
湿疹、蕁疹	無	人数	1427	1026	414	2867	n.s.
		%	97.47	98.46	97.41	97.82	
		調整済残差	-1.27	1.78	-0.62		
	有	人数	37	16	11	64	
		%	2.53	1.54	2.59	2.18	
		調整済残差	1.27	-1.78	0.62		
老年痴呆	無	人数	1464	1038	421	2923	P<.01
		%	100.00	99.62	99.06	99.73	
		調整済残差	2.83	-0.85	-2.86		
	有	人数	0	4	4	8	
		%	0.00	0.38	0.94	0.27	
		調整済残差	-2.83	0.85	2.86		
精神分裂病、躁うつ病	無	人数	1412	1011	419	2842	n.s.
		%	96.45	97.02	98.59	96.96	
		調整済残差	-1.62	0.14	2.11		
	有	人数	52	31	6	89	
		%	3.55	2.98	1.41	3.04	
		調整済残差	1.62	-0.14	-2.11		
神経症	無	人数	1423	1019	417	2859	n.s.
		%	97.20	97.79	98.12	97.54	
		調整済残差	-1.20	0.65	0.83		
	有	人数	41	23	8	72	
		%	2.80	2.21	1.88	2.46	
		調整済残差	1.20	-0.65	-0.83		
白内障	無	人数	1404	979	409	2792	P<.05
		%	95.90	93.95	96.24	95.26	
		調整済残差	1.64	-2.47	1.03		
	有	人数	60	63	16	139	
		%	4.10	6.05	3.76	4.74	
		調整済残差	-1.64	2.47	-1.03		
みずむし、たむし等	無	人数	1375	1010	418	2803	P<.01
		%	93.92	96.93	98.35	95.63	
		調整済残差	-4.53	2.55	2.97		
	有	人数	89	32	7	128	
		%	6.08	3.07	1.65	4.37	
		調整済残差	4.53	-2.55	-2.97		
てんかん	無	人数	1295	967	411	2673	P<.01
		%	88.46	92.80	96.71	91.20	
		調整済残差	-5.23	2.28	4.33		
	有	人数	169	75	14	258	
		%	11.54	7.20	3.29	8.80	
		調整済残差	5.23	-2.28	-4.33		

注)調整済残差:残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき P<.05、絶対値が2.58以上のとき P<.01。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。

表41 身体障害者手帳の有無と年齢階層とのクロス表

( $\chi^2$ 乗定:P<.01)

		年齢階層			合計	
		40—64歳	65—74歳	75歳以上		
身体障害者手帳の有無	持っている	人数	439	267	97	803
		%	30.678	26.620	23.951	28.285
		調整済残差	2.854	-1.455	-2.091	
	持っていないが障害あり	人数	313	304	172	789
		%	21.873	30.309	42.469	27.791
		調整済残差	-7.097	2.213	7.121	
	障害なし	人数	663	415	127	1205
		%	46.331	41.376	31.358	42.445
		調整済残差	4.224	-0.851	-4.875	
	不明	人数	16	17	9	42
		%	1.118	1.695	2.222	1.479
		調整済残差	-1.608	0.703	1.337	
合計		人数	1431	1003	405	2839
		%	100.00	100.00	100.00	100.00

注) 調整済残差: 残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき  $P < .05$ 、絶対値が2.58以上のとき  $P < .01$ 。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。

表42 加齢等によって多くみられる障害と年齢階層とのクロス表

			年齢階層			合計	χ <sup>2</sup> 乗検定
			40—64歳	65—74歳	75歳以上		
		人数	1464	1042	425	2931	
		%					
		調整済残差					
言語障害	無	人数	1151	842	318	2311	P<.05
		%	78.62	80.81	74.82	78.85	
		調整済残差	-0.30	1.93	-2.20		
	有	人数	313	200	107	620	
		%	21.38	19.19	25.18	21.15	
		調整済残差	0.30	-1.93	2.20		
嚥下障害	無	人数	1393	973	374	2740	P<.01
		%	95.15	93.38	88.00	93.48	
		調整済残差	3.65	-0.17	-4.95		
	有	人数	71	69	51	191	
		%	4.85	6.62	12.00	6.52	
		調整済残差	-3.65	0.17	4.95		
麻痺	無	人数	1376	955	365	2696	P<.01
		%	93.99	91.65	85.88	91.98	
		調整済残差	4.00	-0.49	-5.01		
	有	人数	88	87	60	235	
		%	6.01	8.35	14.12	8.02	
		調整済残差	-4.00	0.49	5.01		
不随運動	無	人数	1433	1000	405	2838	P<.01
		%	97.88	95.97	95.29	96.83	
		調整済残差	3.26	-1.97	-1.95		
	有	人数	31	42	20	93	
		%	2.12	4.03	4.71	3.17	
		調整済残差	-3.26	1.97	1.95		
痙攣発作	無	人数	1322	976	405	2703	P<.01
		%	90.30	93.67	95.29	92.22	
		調整済残差	-3.88	2.17	2.56		
	有	人数	142	66	20	228	
		%	9.70	6.33	4.71	7.78	
		調整済残差	3.88	-2.17	-2.56		
歩行障害	無	人数	1164	722	216	2102	P<.01
		%	79.51	69.29	50.82	71.72	
		調整済残差	9.36	-2.17	-10.34		
	有	人数	300	320	209	829	
		%	20.49	30.71	49.18	28.28	
		調整済残差	-9.36	2.17	10.34		
眼の障害	無	人数	1314	948	373	2635	n.s.
		%	89.75	90.98	87.76	89.90	
		調整済残差	-0.26	1.44	-1.58		
	有	人数	150	94	52	296	
		%	10.25	9.02	12.24	10.10	
		調整済残差	0.26	-1.44	1.58		
耳の障害	無	人数	1385	960	376	2721	P<.01
		%	94.60	92.13	88.47	92.84	
		調整済残差	3.71	-1.10	-3.77		
	有	人数	79	82	49	210	
		%	5.40	7.87	11.53	7.16	
		調整済残差	-3.71	1.10	3.77		
床ずれ	無	人数	1450	1036	420	2906	n.s.
		%	99.04	99.42	98.82	99.15	
		調整済残差	-0.61	1.21	-0.78		
	有	人数	14	6	5	25	
		%	0.96	0.58	1.18	0.85	
		調整済残差	0.61	-1.21	0.78		
その他	無	人数	1439	1017	411	2867	n.s.
		%	98.29	97.60	96.71	97.82	
		調整済残差	1.76	-0.59	-1.69		
	有	人数	25	25	14	64	
		%	1.71	2.40	3.29	2.18	
		調整済残差	-1.76	0.59	1.69		

注) 調整済残差: 残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき P<.05、絶対値が2.58以上のとき P<.01。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。

## Ⅶ. 我が国の知的障害者施設群にみる加齢の推移 ～まとめに換えて～

既述のとおり、本研究では、調査のための評価表は、10年前の1991年時と同様の内容で、調査対象も同様の各施設に依頼した。調査内容は既述のように、年齢、性別、知的障害の原因、身体的な健康、心の健康、行動範囲及び食事、排泄、投薬、移動、視力、聴力等の日常生活行動であり、これらの内容の10年の経年変化を把握することにより、高齢知的障害者の加齢の実態を分析・検討を図ったのである。調査対象は、介護保険対象との整合性も考慮して40歳以上65迄と、65歳以上とした。以下、それぞれの領域別、10年間の変化の概要と、2001年時の横断的な視野からの加齢の推移を、そのクロス表を示し、概要を述べることにする。

### 1. 知的障害者施設に占める高齢者数の推移

施設に生活する知的障害者の数は49,485人から66,431人と10年間で増加した。増加の割合は10年前を1とすると1.34である。加齢の推移として高齢者の数と比較すると、10年間の間に50歳代で1.74に、60歳前半で2.67に、65歳以上では3.45に、それぞれ急増しているが、特に60歳代後半以降で著しい。

表 43 高齢者の知的障害者更生施設に占める年度別推移

	利用者数(人)	50～59歳(%)	60～64歳(%)	65歳以上(%)
1989年	49,485	14.4	3.3	1.1
1990年	50,827	15.4	3.8	1.2
1991年	54,126	16.6	4.4	1.4
1992年	56,188	17.8	4.9	1.6
1993年	57,823	18.7	5.4	1.9
1994年	63,080	19.9	6.1	2.2
1995年	64,862	20.6	6.7	2.6
1996年	65,115	21.8	7.6	3.0
1997年	65,513	23.2	8.2	3.5
1998年	66,431	25.0	8.8	3.8

2. 高齢期にみる性差では、2001年の結果も、10年前と同様に、60歳頃までは男性の占める割合が女性より多いが、60歳を越えて女性の割合が増加した。70歳代以降では、男性と女性の比率は1：1.4となった。

表 44 性別 単位 人 ( ) %

2001年		男	女	計	1991年		男	女	計
年 齢	40～64	732(52.3)	667(47.7)	1,399(100)	年 齢	40～49	412(50.8)	398(49.2)	810(100)
	65～74	335(48.6)	355(51.4)	690(100)		50～59	213(50.9)	205(49.1)	418(100)
	75以上	59(44.7)	73(55.3)	132(100)		60～69	89(46.3)	103(53.7)	192(100)
計		1,126(50.7)	1,095(49.3)	2,221(100)	70以上	11(42.3)	15(57.7)	26(100)	
					計	725(50.1)	721(49.9)	1,446(100)	

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

3. 知的障害の程度については、10年の経過で有意差はみられないが、40歳以降の各年代と概ね程度の軽い人と重い人の割合は1:2で、重度の割合が高い。以前には高齢者では軽度の人割合が高いデータもみられたが、この10年の経過では重度の占める割合に変化はみられない。或いは40歳以降では程度別の死亡率に変化はないように思われる

表 45 知能程度 単位 人 ( ) %

2001年		中・軽度	重・最重度	不明	計
年 齢	40～64歳	454(32.7)	912(65.6)	24(1.7)	1,390(100)
	65～74歳	256(37.3)	425(61.9)	6(0.9)	687(100)
	75歳以上	44(33.3)	87(65.9)	1(0.8)	132(100)
計		754(34.1)	1,424(64.5)	31(1.4)	2,209(100)
1991年		35.5%	61.8%	3.7%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

4. 施設職員による、「加齢によるとみられる変化」では、中年期では3割程度の人にみられた。60歳をこえては、変化のみられる人は半数をこえ、70歳代以降では、殆どの人に「この数年変化みられる」となった。この傾向は一般社会の人々とそう変わらないようにも思われるが、どうであろうか。

表 46 加齢による変化 単位 人 ( ) %

2001年		変化あり	変化なし	不明	計
年 齢	40～64歳	469(33.6)	867(62.1)	60(4.3)	1,396(100)
	65～74歳	364(53.3)	294(43.0)	25(3.7)	683(100)
	75歳以上	84(65.1)	40(31.0)	5(3.9)	129(100)
計		917(41.5)	1,201(54.4)	90(4.1)	2,208(100)

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

5. 毎日の生活にみられる行動範囲では、全体として10年の経過（この調査対象施設は同様のものであるから、調査対象も殆ど同様の人、つまり10年の年齢をとったと考えらよう。）では、活発な行動の人の数は減少し、「寝たきり」「寝たり起きたり」「あまり活動的でない一部屋を中心として」等の人々の割合はいずれも増加の傾向を示した。

表 47 行動範囲 単位 人 ( ) %

2001年	行動は活発	普通に行動	生活寮中心	居室中心	介助移動	寝たきり	計	
年 齢	40～64	173(12.4)	719(51.5)	395(28.3)	84(6.0)	22(1.6)	2(0.1)	1,395(100)
	65～74	67(9.7)	372(54.0)	194(28.2)	43(6.2)	7(1.0)	5(0.7)	688(100)
	75以上	6(4.5)	57(43.2)	51(38.6)	13(9.8)	3(2.3)	2(1.5)	132(100)
計	246(11.1)	1,148(51.8)	640(28.9)	140(6.3)	32(1.4)	9(0.4)	2,215(100)	
1991年	18.6%	53.0%	22.0%	4.2%	0.3%	0.4%	100%	

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみのデータです。

6. 「毎日の健康」の推移も、上記と同様の傾向がみられた。健康の人の占める割合は激減した。また、ベットで終日過ごすような人は、目立った増加はないが、投薬を受ける人の数は増加し、利用者の半数をこえた。なおこれらの傾向は年代別に増加した。

表 48 毎日の健康 単位 人 ( ) %

2001年	極めて元気	時に風邪をひく程度	やや病弱	定期に診察服薬	寝たり、起きたり	ほとんど寝たきり	計	
年 齢	40～64	233(16.7)	430(30.7)	37(2.6)	682(48.7)	12(0.9)	5(0.4)	1,399(100)
	65～74	73(10.6)	182(26.5)	24(3.5)	397(57.7)	7(1.0)	5(0.7)	688(100)
	75以上	15(11.6)	35(27.1)	5(3.9)	71(55.0)	2(1.6)	1(0.8)	129(100)
計	321(14.5)	647(29.2)	66(3.0)	1,150(51.9)	21(0.9)	11(0.5)	2,216(100)	
1991年	28.1%	27.1%	3.1%	39.6%	0.2%	0.4%	100%	

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみのデータです。

7. 加齢に従っての人間関係をみたが、2001年のクロス表では、加齢による年代別の変化はみられなかった。しかし、同様の人達を追った、10年間の変化では、孤独への傾向がみられ、「仲の良い」関係は減少、前述の5項「行動範囲」6項「健康の推移」にみられた、投薬者が増加し、活動性が減少の傾向は、施設集団における「集団指導」のプログラムの必要を考えさせるように思える。



表 49 周囲の人達との関係

単位 人 ( ) %

2001年		皆と仲良く	大体うまく	孤立気味	全く孤立	計
年 齢	40～64歳	262(18.8)	589(42.3)	431(31.2)	101( 7.2)	1,383(100)
	65～74歳	118(17.1)	338(49.1)	204(29.8)	26( 3.8)	686(100)
	75歳以上	28(21.4)	52(39.7)	42(33.0)	5( 3.8)	127(100)
計		408(18.4)	979(44.2)	677(30.8)	132( 6.0)	2,196(100)
1991年		29.2%	41.1%	11.6%	15.9%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

### 8. 日常生活動作

毎日の生活の動作については、摂食、排泄、入浴、着衣、移動、聴力、視力、手先の機能等、会話の能力を除いて、すべて有意に1991年時の調査結果より、2001年調査結果で、自立の人が減少しケアのニーズの濃い人が増加した。10年間の経過(加齢)により、知的障害者更生施設では、明らかに介護のニーズが増加したことを示しており、40歳以降の増加、殊に65歳以降の高齢者の増加は、更生施設での介護への対応は、すべての面(ケアのプログラム、介護の内容、介護を行う人等)で考慮されなければならない。

会話の能力については、若干の変化は伺えるものの、素データの集析からは、有意差は見られない。知的障害者の加齢の特徴なのか、施設ケアの成果と考えて良いのかは定かでない。

投薬に関しては、要介護者の増加と加齢を反映してか、殆ど、全員が要介助、或いは要支援の対象となった。こうしたことから、日常生活動作に関しては、すべての面で、手厚い介護への対応が求められていると考えられる。

表 50 食事

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	744(53.3)	450(32.2)	184(13.2)	19( 1.4)	1,397(100)
	65～74歳	320(46.5)	303(44.0)	57( 8.3)	8( 1.2)	688(100)
	75歳以上	40(30.5)	77(58.8)	11( 8.4)	3( 2.3)	131(100)
計		1,104(49.8)	830(37.5)	252(11.4)	30( 1.4)	2,216(100)
1991年		69.4%	24.3%	4.6%	0.7%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 51 排泄

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	795(57.0)	336(24.1)	190(13.6)	73( 5.2)	1,394(100)
	65～74歳	381(55.4)	190(27.6)	93(13.5)	24( 3.5)	688(100)
	75歳以上	49(37.4)	47(35.9)	26(19.8)	9( 6.9)	131(100)
計		1,225(55.4)	573(25.9)	309(14.0)	106( 4.8)	2,213(100)
1991年		71.8%	16.2%	9.6%	1.2%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 52 入浴

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	476(34.1)	269(19.3)	525(37.6)	126( 9.0)	1,396(100)
	65～74歳	211(30.7)	187(27.2)	245(35.6)	45( 6.5)	688(100)
	75歳以上	26(19.8)	32(24.4)	58(44.3)	15(11.5)	131(100)
計		713(32.2)	488(22.0)	828(37.4)	186( 8.4)	2,215(100)
1991年		48.5%	20.6%	26.1%	3.8%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 53 着衣

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	707(50.6)	286(20.5)	332(23.8)	71( 5.1)	1,396(100)
	65～74歳	339(49.3)	208(30.2)	120(17.4)	21( 3.1)	688(100)
	75歳以上	58(44.3)	39(29.8)	30(22.9)	4( 3.1)	131(100)
計		1,104(49.8)	533(24.1)	482(21.8)	96( 4.3)	2,215(100)
1991年		64.9%	15.8%	16.3%	2.0%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 54 移動

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	696(49.9)	353(25.3)	277(19.8)	70( 5.0)	1,396(100)
	65～74歳	305(44.3)	186(27.0)	160(23.3)	37( 5.4)	688(100)
	75歳以上	37(28.2)	43(32.8)	43(32.8)	8( 6.1)	131(100)
計		1,038(46.9)	582(26.3)	480(21.7)	115( 5.2)	2,215(100)
1991年		68.0%	16.2%	12.2%	2.7%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 55 聴力

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	937(67.8)	298(21.6)	114( 8.2)	33( 2.4)	1,382(100)
	65～74歳	350(51.0)	222(32.4)	98(14.3)	16( 2.3)	686(100)
	75歳以上	39(30.0)	54(41.5)	32(24.6)	5( 3.8)	130(100)
計		1,326(60.3)	574(26.1)	244(11.1)	54( 2.5)	2,198(100)
1991年		83.3%	8.4%	4.7%	1.4%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 56 視力

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年 齢	40～64歳	918(66.6)	301(21.8)	123( 8.9)	36( 2.6)	1,378(100)
	65～74歳	373(54.5)	231(33.8)	65( 9.5)	15( 2.2)	684(100)
	75歳以上	53(41.1)	56(43.4)	18(14.0)	2( 1.6)	129(100)
計		1,344(61.3)	588(26.8)	206( 9.4)	53( 2.4)	2,191(100)
1991年		78.8%	10.7%	6.7%	1.4%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 57 手先の機能

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年齢	40～64歳	364(26.2)	491(35.4)	519(37.4)	14( 1.0)	1,388(100)
	65～74歳	194(28.3)	268(39.1)	219(31.9)	5( 0.7)	686(100)
	75歳以上	29(22.1)	44(33.6)	56(42.7)	2( 1.5)	131(100)
計		587(26.6)	803(36.4)	794(36.0)	21( 1.0)	2,205(100)
1991年		40.2%	33.3%	24.6%	0.8%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 58 言葉の明瞭度

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年齢	40～64歳	428(30.9)	405(29.3)	364(26.3)	186(13.4)	1,383(100)
	65～74歳	273(39.8)	227(33.1)	160(23.3)	26( 3.8)	686(100)
	75歳以上	47(35.9)	43(32.8)	33(25.2)	8( 6.1)	131(100)
計		748(34.0)	675(30.7)	557(25.3)	220(10.0)	2,200(100)
1991年		28.7%	44.4%	19.6%	2.3%	100%

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

表 59 服薬

単位 人 ( ) %

2001年		自立	ほぼ自立	要介助	全介助	計
年齢	40～64歳	96( 7.1)	471(34.8)	786(58.0)	2( 0.1)	1,355(100)
	65～74歳	48( 7.1)	259(38.4)	364(54.0)	3( 0.4)	674(100)
	75歳以上	4( 3.1)	45(34.9)	78(60.5)	2( 1.6)	129(100)
計		148( 6.9)	775(35.9)	1,228(56.9)	7( 0.3)	2,158(100)

注) 1991年データとの整合性を考慮し、知的障害者更生施設のみデータです。

9. 10年間時系的集析の結果から次ぎのように、今後への対応が示唆された。

- ① 40歳以降、とくに65歳以降の高齢者の増加は著しく、「高齢者ケア」の必要と、人的、物的な施設援助体制の転換が望まれる。
- ② 施設職員の利用者観は、一般社会の高齢者観と殆ど同様であった。
- ③ 行動(アクティブティ)については、若干ではあるが“寝たきり”等の増加の傾向を示した。今後、これらの人の増加も示唆されて、「介護の専門化」への考慮も必要

である。

- ④ 健康については、毎日の生活で健やかに生活を送る人は減少し、投棄を受ける人は増加した。ADL の項目にみられるように、生来の知的障害と加齢が影響しているであろう、すべての人が投棄への配慮（40歳以上）が欠かせない。
- ⑤ 人間関係では孤独化の傾向がみられた。明らかに加齢によるものと考えられ、「個と集団」へのプログラムが強化されねばならない。
- ⑥ 生活動作については、当該項目で記述し、介護の必要、対策の急務を述べた。経年変化の縦断的、横断的集析からは、加齢への対応の緊急性と対応の内容、プログラムへの検討が求められている。

---

平成 12 年度厚生省障害保健福祉総合研究

重介護を要する知的障害者及び高齢知的障害者の援助に関する研究

主任研究者 三村 誠

平成 13 年 3 月 31 日発行

編集 国立コロニーのぞみの園

印刷 朝日印刷工業株式会社

---